不死鳥の卵～ｌｉｇｈｔ　ｗｒｉｔｅ　Ｋｎｉｇｈｔ～

ひさなぽぴー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不死鳥の卵～ｌｉｇｈｔ　ｗｒｉｔｅ　Ｋｎｉｇｈｔ～

【Ｎコード】

Ｎ５００６Ｃ

【作者名】

ひさなぽぴー

【あらすじ】

地球という星があります。広い広い宇宙の中に存在する無数の銀河の中の一つ、彼らが銀河系と呼ぶ中の、そのまた無数に存在する星系の一つ、太陽系と彼らが呼ぶ星の集まりで唯一、生物が存在する惑星です。そんな地球の中で、小さくとも発展した国日本。その国に、一人の少年がいました。緑色の瞳を持つ彼は、いつも周りからいじめられていました。人とは違う色の眼であっても、彼は一生懸命に生きていました。唯一の親友である少女と共に…。やがて彼は、時を越える翼を羽ばたかせて不死鳥になるのです――。

0.　ヒカリ

その日は、八月の終わりだった。
暦の上では既に秋だが、それでも未だ暑さは色濃く残るその日。三十度を超え、そのうだるような暑さに人々が心の中で悲鳴を上げる街に大粒の雪が降った。
急に気温が下がったというわけでもなければ、特に何か前触れがあったわけでもない。それはまさに青天の霹靂と言うがごとく突然現れた。
ビルが密集しヒートアイランドの加速する摩天楼の空に、まるで漂白剤で染め抜いたかのような真っ白い雪が舞い、道行く人もそうでない人も、その光景に思わず仕事の手や歩く足を止めた。
そして、まるでその雪に祝福されているかのようにこの世に生を受けた少年がいた。
摩天楼の中に埋もれる小さな病院の一室で、産声を上げることなく彼は生まれた。また産道を通ることもなく、彼は帝王切開によって空気に触れた。別にそれはそこまで珍しいというようなことではない。
だが、何よりも彼の存在を否応なしに周囲に認めさせるものが、彼にはあった。それは、日本人の黒髪の中に煌々と浮かび上がる翠緑の瞳だった。
その瞳の色を見た医師達は、何かの間違いではないかと精密検査を重ねに重ねた。なぜならその鮮やかな瞳は、かつて報告例がないほど美しく、朝陽や夕陽の光が映ると神秘的な輝きを放つのだ。結局原因は不明のまま、母親とは過ごせない一ヶ月が彼の人生の始まりだった。

やがて彼も家族に連れられ退院した。家族といっても彼の父親は既におらず、ただ内科の医者として開業していた母親の女手一つで彼は成長することとなる。
灯台のように、人々の導き手となりますように。
母親はそう願いを込めて息子に、翠緑に輝く瞳を持つ息子に、光と命名した。
そして――

1. アリス

穏やかな秋の昼下がり。陽気は暑くもなく寒くもないくらいで、子供たちにとっては絶好の遊び時間だ。この小学校のグラウンドでも、遊びに興じる子供たちの歓声で満たされている。
ブランコに乗る子もいれば、サッカーをする子もいるし、もちろん中には教室で友達と喋っていたりする子もいる。とかく子供たちは遊びに一生懸命だ。
その中で、数人様子の違う子供たちがいた。
彼らがいるのは校舎の丁度裏側。あまり普段は人が寄り付かない場所だ。そんな場所に、四人の少年が、一人の少女――いや、少年を囲んで罵声を浴びせていた。更には、時折中央の少年に石を投げつけたり、蹴ったりする者もいる。遊ぶとかそういう次元の行為ではない。誰の目で見ても、それがいじめなのは火を見るより明らかだ。
何かされるたびに、いじめられている少年は歯を食いしばってその場でただじっと耐えている。声を出すわけでもなく、ただじっとうずくまって。
「緑ー！」
「緑っ子ー！」

周りのいじめっ子たちは、なんらかの周期でもあるかのように少年に対して緑、という言葉を叩きつける。言いながら、また少年を蹴りつける。それでもやはり少年は耐えるだけだ。
いじめっ子たちが言う言葉の意味は、いじめられている少年の瞳を見れば一目瞭然だった。
今は涙で潤むその瞳の色は、日本人――いや、この世界の人間にはあるまじき煌くような翠緑色だった。校舎の影であるため陽は差してこないが、恐らく陽光を浴びればそれは美しく輝くだろう。
その緑色の瞳から、一条の涙が零れ落ちた。それは少年の頬を伝って服に滴り落ち、雫の跡を作る。そして、その部分の周りや地面には、恐らく少年の涙の跡であろう湿った部分がある。この涙の前にも同じように地面へ向かって走った涙があったのだろう。
少年の顔は、成長すれば美しくなるだろう。幼いながらも整っている。しかし、今の彼の顔は泥と涙でとても見られたものではない。顔に傷がないのが意図的なのか知る由もないが、いじめっ子たちの慣れたやり方を見る限りこれは日常的に繰り返されていることのようだ。
虚空に視線を投げかける少年の瞳には、諦めと、絶望と、悲しみと――そして、一縷の望みとが複雑に入り混じっている。
「バケモノ！」
今まで緑、と言っていたいじめっ子たちの言葉が更に鋭くなった。彼ら一般的な日本人にしてみれば、緑の目を持っている人間など妖怪か何かに分類されてしまうほどのことなのだろう。無理はない。いや、日本人でなくともこれほど鮮やかな緑の瞳には驚くだろう。
「お前なんか退治してやるぞ！」
一人のいじめっ子が、その辺りに転がる小石を無造作に拾い上げると、握り締めて振りかぶった。
少年は来るべき痛みに堪えるため、目を閉じて身体を強張らせる。しかし、いくら待っても変な沈黙が続くだけでそれらしい痛みがやってくることはなかった。

恐る恐る目を開けた少年が見たものは――
「…あんたらいい加減にしなさいよ！」
先ほど小石を投げつけようとした少年の腕を、一人の少女が掴んでいた。
他のいじめっ子たちは、お互い囁きあうと、捨て台詞も残さずそこから走り去っていった。最後に腕を掴まれていた少年は、少女に背中から突き飛ばす形で解放されてその場で転んだ。その少年は先に行った三人を慌てて追いかけていって、校舎の影に消えた。
いじめっ子たちが消えるのを確認すると、少女はしゃがんで少年の顔を覗き込んだ。
「…大丈夫？」
「……うん…」
消え入るようなか細い声で、少年は辛うじて頷いた。少女はそれを聞くと、すっくと立ち上がって手を差し伸べる。
「ほら立って。それくらいできるでしょ？」
少年は無言で少女の手を掴むと、のろのろとその場に立ち上がった。しかし、それでも彼は少女の手を握ったままずっとうつむいている。
「…まったくー…。あんたも抵抗しないからそうなるのよ。あーゆーやつらはね、こっちが黙ってると付け上がるの！」
少年の手を振り払って、少女はすぱっと言う。少女の言葉に、少年は更にうつむいた。
「…ボクじゃ…勝てっこ…ないもん…」
「はいはい、そのセリフは聞き飽きました」
少女はいいながら少年に向き直る。そして無理やり少年の視線を自分のそれに重ね合わせると、ゆっくりと口を開いた。
「いーい？光。あたしだって幼馴染のあんたがいじめられてるとこなんて見たくないわ。でもあんたが変わろうって思わない限りこれ、きっとずーっと続くわよ？」
「……でも…！」

ぎゅっと瞑られた瞳から、大量の雫が溢れ出る。今まで耐えてきた分が一斉に堰を切ってあふれ出し、そのままそれは濁流となって少年――光の頬を伝っていく。

「…あたしのこの言葉、もう聞き飽きたと思うし、正直光には辛いと思うよ。でも、あたしあんたに変わってほしいから…もっと強くなってほしいから言うの。…できる限りあたしも手伝うから」

光からの返答はなかった。いや、あえて言うなら、声を上げて泣いたというのが彼なりの返答だったのかもしれない。

しばらくの間、二人はそこに立ち尽くしていた。

夕陽が青かった空を焼き、オレンジの空が広がっている。カラスが七つの子の待つねぐらへ帰ろうとする時間帯、子供達もそれぞれの家路へとついていく。夕陽を背にして、黒くて長い影があの二人の前を長々と歩いている。

「…アリス…」

「ん？」

光は呟くように口を開いた。アリスと呼ばれた少女は、光に顔を向ける。それと同時に、彼女の首から下げられている大きな黒水晶がはめ込まれたペンダントが揺れる。

アリスは、顔立ちこそ日本人のそれだったが、髪色や瞳の色が違っていた。薄い金色の髪で、瞳は西洋人の青い瞳。光の鮮やかな翠緑の瞳と比べるとそれは淡く、くすんだ色、と言ったほうがを正しいだろう。いわゆるハーフ、というやつだ。

「…ごめんね…」

明るいアリスの声とは対照的に、ポツリとそれだけ言って光は黙り込んだ。

「いつものことでしょ。気にしないで」

努めて優しい笑顔を見せて、アリスは後ろで自分の手を組むと、更に続ける。

「…友達でしょ、あたしたち」
「…ありがとう…」
身体が小さいせいで、どちらが背負われているのかわからないくらい大きく見えるランドセルを抱えて、光はそれだけを返した。そんな光の瞳は、逆光の暗さの中でも美しく、よく映えた。
「…キレイなのにな、緑色…」
小さな人間の身ではとても行くことのできない遥か上空を見上げながら、アリスはひとりごちる。道端に視線を落としていた光は、その時だけアリスの横顔に目をやった。
二人はそのままゆっくりと街並みの中へと溶け込んでいく。まもなく日没だ。
やがて二人は、一軒の病院の前で足を止めた。
「…じゃあね、アリス。おやすみなさい」
病的といえるほど暗い顔だが、かすかな微笑を浮かべて光はアリスに言う。それを受けて、アリスは隣の家の門をくぐりながら――もちろん笑顔で――手を振って答えた。
「うん、また明日ね！」
アリスが家の中に消えるのを見て、光は病院の裏手に回る。『桐原内科』と書かれた看板を抜けた先に、さながら牢獄のような雰囲気をかもし出す玄関口がひょっこりと顔を出す。
「…ただいま…」
暗い廊下に向かって、誰にともなく光は言った。返事はない。
彼の母親、成美は内科を営む医者である。近くに小児科がないためそちらも扱っており、かなり遅い時間まで営業時間を設定している。女医ということもあってか、子供を抱えた母親たちが多く通院してくる。そして、そんなハードスケジュールにも関わらず日曜日も気楽に往診に応じる成美は良き医者である。
が、光にとって成美はあくまで医者でしかなかった。成美から、母親としての愛情というものはおおよそ受け取った記憶が彼にはない。いつも彼女は忙しく飛び回っており、今も昔もまるで彼のこと

は眼中にないかのようだ。
　光の家は生活部分と病院部分が繋がっている。しかしそちらからの音は、ほとんど生活区域には入ってこない。音の滅多に起こらない暗黒のスペースの中で、独り生きていけるはずなどない。そんな彼が生活を主に送っていたのは、他でもないアリスの家だった。
　今年で五年生になり、流石に幼馴染とはいえ異性の家にずっといるということを遠慮してか彼は自宅で放課後を過ごしているが、この中での生活などまるで空虚で、生きているというよりもむしろ囚人のように生かされている感覚に近い。
　のろのろと自分の部屋に戻ると、彼はランドセルを机に置いて自分のベッドに身体を埋める。そして光は、そのまま暗闇に身を任せて意識を深く沈ませていった。
「…お母…さん…」
　元々小さなその声は、厚い布団に吸収されて本人にすらほとんど届かなかった。
　こうして、光の一日は過ぎていく。ただ、今を生きるだけの術しか――あるいはそれすら――彼にはわからなかった。こんな毎日を送って死んでいくのかという思いは、自然に彼の枕を涙で濡らす。

2.　カイト

　基本的に、一度人間が持った感情、特に負の感情は滅多なことでは変わらない。そのくせ、よくよく原因を見つめなおしてみるとそれは実に些細なことであることも多い。
　そんなわけで、中学校に進学しても光の生活にほとんど変化がなかった。
　他の小学校から生徒が集まってくるから、もしかしたら一人くらいは友達もできるかも、という淡い期待はものの見事に粉砕された。

それも実に早い段階で。
誰もが光を奇異の目で見つめる。その緑色の視線を感じると、慌ててその視線から外れようとする。同じ小学校だったものはさすがに慣れていて――意図的にそういう目を向ける。しかし、他の小学校から来たものたちは光の瞳のことは知らない。珍しいもの――さしずめ動物園で異国の動物を見るような目で見られるのだ。
そして性質の悪いことに、今まで光をいじめてきた連中がその手――後々冷静になって考えてみれば実にいかがわしい――の話を吹き込んだせいか彼は今まで以上に孤立していった。肉体に直接受けるようないじめはなくなった。けれども、その代わりに今度は精神的ないじめが始まった。
誰も光に話しかけようとしない。授業中教師に何か言われた時など、どうしてもという時は言葉を交わすが、それ以外では誰も絶対に彼に話しかけようとしないのだ。たった一人、アリスだけを除いて。
しかし、アリスはアリスでバスケットボール部に入部したため、下校時には独りで帰ることが多くなり、元々口数の少なかった光は、ますます暗くなっていった。
また、光は人気のない家を嫌ってすぐに家に帰らない。スーパーマーケットや本屋などで時間を潰し。ある程度暗くなってから帰る。成美は相変わらず忙しいから。家にいてもすることがないから。
ある日、いつものように彼は時間つぶしのため既に通いなれた本屋の入り口をくぐり雑誌コーナーへ足を運んでみれば、ある月刊の漫画雑誌に新連載が始まっているのを見つけた。『新連載「ウイング」』というレタリングがカラーで刷られた表紙をめくると、その新連載なるものが十数ページにわたって、表紙と同じくカラーで続いていた。
それはごくごくありふれたファンタジーの世界観だった。剣と魔法が存在し、善と悪がいる。善は仲間と共に悪を討つ――そんな筋書きらしかった。

光は、そのカラーページのキャラクターたちをじっと見つめる。その中に、誰一人として黒髪と黒い瞳を持つキャラクターはいなかった。青や赤や、そして緑など、実際にはありえない瞳を持ったキャラクターたちがそこにいる。

――こういう世界に行けたらなぁ…。

心の奥で、光は呟いた。こういう世界なら、どこにいても自分の緑の瞳を異端視する目はないはずだ。そう思いながら、光は自分と同じ緑色の瞳を持ったキャラクターに視点をあわせた。

プロローグであろうその話から時間を遡ることで物語は始まっている。その、遡る前の場面にだけ描かれているそのキャラクターは、紫がかった青い髪と、光のような鮮やかな翠緑の瞳を持っていた。作者にはまだ名前を公開するつもりがないらしく、そのキャラクターの名前はどこにも書かれていなかった。

普段お金を持ち歩いていない光だが、この雑誌は何故か欲しかった。いや、正確にはこの物語がほしかった。いつか連載が続けば、単行本として発売されるだろう。しかし、それを待つ気には何故かなれなかった。

自分がお金を持っていないことに気付くと、光は雑誌を元へ戻し家に向かって駆け出した。家に飛び込んで自分の部屋にかばんを置くと、財布を握り締めて再び家から飛び出す。　買わなければいけない。何故かわからないが、そんな気がした。

女男。

いつの間にか、そんなあだ名が光についた。

周りの男子が二次性徴を向かえ、声変わりと共にぐんと背が伸びていくのに対し、光はそんな気配は微塵もないことが原因だ。中学二年生になっても身長は百四十に届かず、声変わりなど一体どこに置いてきたのかと思えるほど高い。言動も女々しく、もはやパッと見ただけでは光が男なのか女なのか、即座に判断を下すことは難し

くなっていた。このあだ名のおかげなのか、それとも周りがただ慣れただけなのかはわからないが、最近は光への風当たりはかつてほど厳しくはなかった。

そういえば、光が『ウイング』と名づけられた漫画を購読し始めてからそろそろ一年になる。最初名前のわからなかった、あの翠緑の瞳を持つキャラクターの名前は『カイト』ということがわかっていた。なんでもそつなくこなし、格闘も魔法も抜群の冴えを見せるだけでなく、頭もいい。まさに絵に描いた万能のキャラクターだった。

この漫画をきっかけに、光は絵――というか漫画を描き始めた。元々絵は得意なほうだったからなのか、それとも練習に割ける時間が多いからなのかわからないが、とにかく上達速度はわりと早かった。

それまでは部活動に参加していたわけではなかったが、最近になって一応存在していた漫画研究部に入部した。業後はそこで絵の練習に励む毎日をここ一年近く続けている。下校最終時刻まで残っているから、小学校時代のようにアリスと帰ることも多くなった。

これくらいで満足するべきなのかな、と自分に言い聞かせて、光はかばんを背負いバインダーを抱えて校門を出た。このバインダーには、ファイリングされた絵が入っている。色々と考えて、今漫画にしてみようと挑戦している話で、今のところこれはアリスにも見せていない。ちなみに見せられない理由はびっくりさせようとかそういうものではなく、単純に恥ずかしいからだ。

寂しさや孤独感がないわけではない。だが、今は去年までに比べれば問題ないレベルだ。

高望みはしないほうがいいかな。そんな風に思考をぐるぐるめぐらせながらとぼとぼと歩く光を、後ろから眺める三人の少年がいた。三人ともやけに黒い笑顔を浮かべて光に駆け寄る。

「よーう桐原、最近やけに下校が被るねぇ」

一人の少年が、光になれなれしくもたれかかった。突然のことに、

光は足を止めてただ目を丸くすることしか出来ない。
「今日は一人かよ？恋人さんはいないんですか？」
別の少年がニヤついた目で光を覗き込む。誰のせいだとは言わないが、光はその手の話には極めて疎い。そんな彼が、少年の言う『恋人』が意味するのが誰なのかわかるはずもない。
「こいびと…なんて…いないよ…」
辛うじて聞き取れるような声を搾り出して光は彼らから逃げようとするが、更に別の少年が光をマークして離さない。力のない光は、こういう風にされると逃げることができないのを判っているのだ。
「しらばっくれんな！」
光にもたれかかった少年が突然怒鳴った。耳元で大声を上げられて、光は思わず身体を強張らせた。
「お前やけに笠山と仲いいよな。あれはどう説明するつもりだ、おい？」
「あ…アリスのコト…？アリスは…ただの幼馴染で…！」
精一杯の抵抗を込めて光は言う。しかし、最初から光と馴れ合うつもりなどない少年たちは、そのかすかな抵抗を無視して光を傍の壁に押しつけて取り囲んだ。
「お前ごときが笠山さんとなれなれしくするんじゃねぇよ！」
「おうよ。彼女に迷惑だろ」
言葉の端々から、どうも彼らがアリスに惚れているらしいということは、ある程度人生経験があるものならわかっただろう。だが、光はこと対人関係に関してはまったくといっていいほど無知だった。そして、三人の少年たちにとってそういうことがわかろうがそうでなかろうが、どちらでもいいことだ。
「お？こりゃお前が描いてるのか？」
最初光を覗き込んだ少年が、光の持っていたバインダーの中を見て頓狂な、それでいて嬉しそうな声を上げる。それは丁度、幼児がオモチャを手に入れたような顔だった。
「へぇ？どんなん？」

「見せろ見せろー」
他の二人もそれに群がる。慌てて光は取り返そうと近寄るが、すぐに壁に思いっきり抑えつけられて動けなくなる。
「や…やめて…やめてよぉ…！」
ぐったりとその場にうずくまってしまった光の瞳から、涙が零れ落ちた。痛みによる涙は約二年ぶりだろうか。
しばらく、描きかけの原稿に見入っていた少年たちは、出し抜けに笑い出した。それも半分以上わざだと思えるような大げさな笑い方で。
「くっだらねぇー、お前こんな恋愛もの好きなのかぁ？」
「男がこんな少女漫画みてーの描いてんじゃねーって！」
「は、ハラいてぇわー」
「……」
笑いに続いた罵倒に答えることも出来ず、ぼろぼろと光は大粒の涙を流し続ける。自分自身、女の子みたいだと思っているだけに、彼らの言葉は鋭い刃となって光の心を深く抉り取る。
「ってかお前男じゃないだろ」
「女っつったほうがいいって、絶対」
「お前頭いいな。じゃこういうのどうよ？」
いいながら光にもたれかかっていた少年が、やおらかばんから取り出したのはどこから用意したのか、女子生徒用のセーラー服だった。
「や…っ、やめ…て…！むぐ…っ！」
声――むしろ悲鳴――を上げかける光の口が強引に塞がれた。両腕は高く上げられて壁に擦りつけられ、無理やり制服を脱がされ。そして――無理やりセーラー服を着せられる。その間の時間は、ごくわずかだった。
「おーおー、似合ってますよ光ちゃん！」
「いっそ明日からそれで登校しろよ！」
「ああ、それ好きにしていいぞ。どうせ姉貴のお古だし」

高らかに笑いながら、三人はその場を離れていった。してやったりというように、やけに楽しそうにはしゃぎながら。その手際のよさは、狙っていて事前に用意していたとしか思えないくらい迅速なものだった。

その場に取り残された光は、そのままそこに座り込んでいた。目は完全にうつろで、ただそこからは涙がとめどなく流れている。今までに描いた原稿は、やはりというかなんというか、踏みにじられてボロボロになっていた。

そのまま日が暮れるまで、光はひたすらに無力な自分を責め続けていた。

光が学校を休んだ。何気なさそうに朝のホームルームで連絡を伝える担任の話を聞いて、アリスは頭の中で嫌な想像が、まるで機械で水素を注がれる風船のようにどんどんと膨れ上がっていくのをやけにはっきりと感じていた。

無視され続けているというのがいいというわけでは無いが、最近は以前ほど陰湿なやり方はされておらず、特に目立ったこともなかったから、あまりかまってやらなかった。

とはいえ、そんなことただの言い訳に過ぎないじゃない。私は彼を、光を放置しすぎたんだ。

アリスは、自分の不手際に――それが無理にでも背負い込んだものであったとしても――内心唇をかんだ。

その日彼女は部活動を早々に切り上げると、早足で光の家へと急ぐ。

いつも通り、光の家――の生活区域――には明かりがともっていない。隣の病院部分からは煌々と明かりが洩れているが、本当に繋がった同じ建物とは思えないくらいそれとはまったく対照的だった。

アリスは光の家の合鍵を持っている。相互の母親同士仲がいいこともあって、昔はよく出入りしたものだった。同様に光はアリスの

家の合鍵を持っているのだが、ここ数年彼はそれを使っていない。アリスからすれば何を遠慮しているんだ、といったところである。
　アリスが玄関を開けると、そこには暗黒の廊下が広がっていた。ここは昔と変わっていない。ふと彼女はそう思った。その暗い廊下を壁伝いに歩いて、彼女は光の部屋をようやく見つけた。
　アリスが静かに戸を開けると、そこはとても一人用の部屋とは思えないほど大きな部屋が広がっていた。その奥のベッドの上で、誰かがうつぶせになっているのが入り口からかすかに見える。言うまでもなく光である。アリスは一瞬眠っているのかとも思ったが、そうではないようだ。時折、くぐもった泣き声が聞こえてくる。少なくとも寝ているわけではない。
「…光…？」
　アリスは、ベッドの前に座って静かに言った。その声に、光の身体が固まった。
「ひっく…アリ…ス…？」
　しゃくりあげるような震えた声が、アリスの耳朶を打った。涙で濡れた翠緑の瞳が、一直線にアリスを見つめている。
「…何があったの…？」
　アリスが言い終わる前に、光はアリスに飛びついた。その様は、アリスには子犬が母親にすがりつくように見えた。
「うわあぁぁぁぁぁぁん！」
　そしてそのまま、アリスですら今まで聞いたことのない大声を上げて、光は思いっきり泣き始めた。どうすることも出来ず、ただアリスは光を撫でるだけだった。それが慰めになるのかどうかは、彼女にわかるはずもない。
　それから涙ながらに光が昨日あったことを語り始めたのは、優に一時間は後だった。多少落ち着いたとはいえ、説明は涙声で途切れ途切れのためわかりづらかった。が、それでもアリスは把握できたのだろう、彼女は回答の代わりに光を優しく抱きしめた。

3.　ツバサ

その日、太平洋上空を飛ぶ飛行機の中に光とアリスはいた。
あれから数年が過ぎ、二人は大学生となっていた。それでも光の外見は全く変わらない。相変わらず子供のようで、言動もどちらかというと子供と間違われても無理はない。
「…あんたも好きよね…。遊びに行くわけじゃないんだから漫画なんて持ってかなくてもいいのに」
持ち込んだ雑誌を読んでいる光に、アリスは母親がぼやくように言った。
「だって！出発の日に最新話が出るんだもん、せっかくカイトの秘密が明かされるのに一週間以上読めないなんて地獄だよ！」
漫画から顔を上げて、光は嬉々として言う。緑の瞳が輝いていた。
色々あったが、光も今では一応の明るさを手に入れていた。高校、大学と、彼をいじめる人はいなかったからだ。もっとも、それは理性が行動を抑えての結果であろうことはなんとなくアリスにはわかっていた。無論そうでない人間もいるだろうが、大抵の人間は光の瞳を見ると畏怖を抱く。
「はー、先が思いやられるわー…」
アリスはため息混じりにつぶやくと、身体を伸ばした。
彼らが向かっている先は、南米ペルー。歴史を専攻する彼らは、二回生にしてその成績が認められて教授に同行が許されたのである。イギリス人とのハーフとはいえ、アリスもペルーなどに行くのは初めてだ。
ちなみに、その教授が調査に向かう所は、インカ帝国の遺跡と現地では言われているようで、教授本人はアイマスクをつけてさっさと眠ってしまっていた。
――まだ、目的地は遠い。

「それでね、カイトって世界が出来た時から世界と一緒にあった存在で世界そのものなんだって」
遺跡に向かう舗装されていない道を行く現地のバス――日本では恐らく化石並みに古い型だ――の中で、光は興奮気味に喋る。長年愛読していた漫画のキャラクターで、また憧れの存在だったカイトの秘密が明かされたらしく、先ほどからこの調子である。
「んもう、漫画なんて読む暇があるならもうちょっとスペイン語とかケチュア語の勉強しなさいよ…」
『ペルー一人歩き』と書かれた本を構えつつ、アリスは光の言葉を受け流した。彼女は父親がイギリス人だから、英語はそれなりに出来る。しかし、さすがにスペイン語やらに関してはまったくの素人。すんなり言葉が通じないということになかなかストレスを感じているようだ。
「おいみんな、そろそろ到着するそうだから降りる準備をしなさい」
現地人の通訳から話しかけられた教授が、光たち同行の大学生に声をかける。それを聞いて、全員が一斉に降りる支度を始めた。全員が音楽プレイヤーや小説などを片付け終わったころ、丁度その遺跡に到着したようだった。ただでさえがたがたと揺れるバスが、一層揺れて停車する。
「なるほど、これが今回新たに見つかったという…」
遺跡の外観を眺めながら、教授はひとりごちた。
それは、エジプトのピラミッドとはまた違う、どちらかというとマヤにある太陽のピラミッドという感じの外見をしていた。頂上にはなにやら足場があるようだが、外からそこまでは行けそうにない。
「へぇー…いかにもなんかありそうだなぁ…」
遺跡の頂上を見上げて、光は思わず嘆息を漏らした。だが背の低い彼は、他の人よりも高い所を見る際には首をより上に向けなくてはならず、すぐに下のほうに視線を移した。

「なんつーかゲームとかによくありそうな感じだな。奥でモンスターとかいねーだろなー？」
同行の学生一人が、冗談交じりに言った。しかし、
「…そんなわけないだろう。さあ、何はともかく中へ入ってみようか。現地の調べではコンキスタドールから逃れた人々に新たに作られた新インカ時代のものらしい」
通訳の話を聞きながら、教授はその言葉を一蹴した。この年代の人々にテレビゲームや漫画の免疫がないのは当然といえば当然だ。
「…なんか…嫌な予感がする…」
「え？なんで？」
列の一番後ろについていたアリスが、ぼそりと呟いた。それに光は頭上に疑問符を作って尋ねる。
「なんでって言われても…ねぇ…。よくわかんないんだけど。とにかく嫌な予感…」
「や、やだなぁアリス、怖いこと言わないでよ…」
うっすらと汗をにじませて光は引きつった笑顔を見せた。アリスもそれにつられるように強張った笑顔を作る。
「ふむ…これは…扉？うーん…どうすれば開くんだろうなぁ…」
遺跡に足を踏み入れた一行を最初に迎えたのは、人どころか二階建てくらいのものでも余裕で通れそうな巨大な扉だった。そこには無数のレリーフと文字が刻まれており、古代の遺跡なのだという実感を改めて得るには十分すぎる代物だ。
『…よく来たな、光…』
「…？」
突然、光は頭の中に声が響くのを感じた。それはわりと高めの男の声で、嫌な感じは伴っていなかった。むしろ、何故かはわからないが親近感すら覚えるくらいだ。光は、思わず足を止めて周りを見渡す。
「…なんだろ…今の…」
思考しかけるも扉を開ける方法を探せという教授の声に、光は思

考を中断して扉に向き直る。そのあまりに巨大な扉を前にすると、自分はどれほど小さいのだろうという思いに駆られる。
「…なんて書いてあるんだろう…？」
そう呟きながら光が扉に触れた、まさにその瞬間だった。
ゴオオォォォォォン……！
重い音と、大量のほこりを巻き上げながらゆっくりと扉が口を開いた。まるで、光に反応したように。いや、光を迎え入れるように、と言ったほうが適当かもしれない。
「え…？え？え？」
全員呆然とその様を見守っていたが、光当人はそれどころではない。何しろ書かれている文字らしきものに手を伸ばした瞬間に扉が開いたのだ。思わず目を丸くしてきょろきょろしてしまう。
「桐原君、どうやって扉を？」
そんな光の下に教授が駆け寄ってきて言った。
「わ、わかりません。ただ触っただけだったんですけど…」
「うーん…。…まあいいか、詳しくは後で調べるとして先に進んでみよう」
教授は問題を棚に上げると、先頭に立って扉の奥へと足を進めた。学生たちがそれに続く。
『気をつけろよ、頼むから…』
また光の頭の中に声が響いた。先ほどの声だ。だが、今回は先ほどよりもノイズが晴れてはっきりとしている。
「…え…？」
光は思わず足を止めるが、
「ん？行くわよ光。」
「あ、う、うん！」
アリスに声をかけられて、光は慌てて駆け出した。そして、再び列に加わって歩みを合わせる。
しばらくは平坦な、真っ直ぐの――何度も曲がりはしたが――道が続いていた。しかし、途中から徐々に傾斜ができ、一行は緩やか

な坂を上っていた。
傾斜を歩き始めてから少々、一行はやけに広い部屋に出た。その部屋の中央は、ぽっかりと暗い口を開いた空間が広がっている。よく見ると、非常に細い橋のようなものが真ん中で向こう側と繋がっていた。
「うーん、人一人通るのがやっとというところかな…みんな、落ちないよう慎重にな」
教授が言いながら、こわごわと橋を渡る。その言葉通り、そこは人がようやく一人通れるくらいの幅しかなく、全員が一列になって進むこととなった。
だが、丁度一行が真ん中あたりに辿り着いた時。
ごぉん…！
鈍い音を響かせて、橋が、横に動いた。
「うわぁぁぁーっ？！」
その動きに煽られて、一人の学生がバランスを崩しそのまま暗い大穴へと消えていった。そして、まるで一人飲み込んだことを確認したかのように、橋は動くのをやめた。他はなんとかその場にしゃがむなどして乗り切ったようである。
「ぎゃあああぁぁあああッ！！」
下のほうから、先ほどの学生の悲鳴、いや絶叫がとどろいてきた。静かな遺跡内を、断末魔と思われる声が震わせる。一行は、そのあまりの出来事にしばらく凍り付いていた。
「…うわっ？1」
最初に動き始めたのは、一行ではなくまたもや橋だった。最初のときのように重々しい大きな音を立てながら、横へと一定距離をスライドする。
「な、なんなんだよこれ…」
「罠か？罠なのか？なんだよ、これじゃホントにどっかのゲームじゃねーか！」
しばらく一行は、左右に動く橋の上で立つことすらままならなか

ったが、その場で様子を見てみると一定の間隔で橋は動いているらしかった。そのタイミングを見計らって、一行はなんとか橋を渡りきった。

渡りきったものの、空気は重かった。一人が暗闇へと消えた。恐らく、彼が生きている可能性は限りなくゼロだろう。先への不安が高まりつつある。進むべきか否か。その場に座り込んで一行は意見を交し合う。

『光…恐れるな、恐れず進め…。そして…俺のところに来るんだ…』

「え？」

またもや光の頭の中に声が響いた。あの、高めの男の声だ。声は、光を誘っている。暗闇が渦巻く、遺跡の深遠へと。光は、やはり突然頭に響いた声に思わず頓狂な声を上げる。

「？どうかしたの、光？」

そんな光に、アリスは心配そうに覗き込んだ。金色の視線が翠緑の視線とぶつかり、光はやや赤くなりながら慌てて首を横に振った。

「な、なんでもないよ」

それだけ言って、光は黙り込んだ。恐れるな、恐れず進め。先ほどの声が、何度も脳裏をよぎる。進んで、果たして大丈夫なのかという疑問が即座に浮かぶ。確かに、彼の人生は自慢できることもないし、非常に荒涼としたものだった。しかし、だからといって死というものに対して恐れがないはずはない。

『…迷うな…俺が誘導する…こんなところで死なせはしない…』

再びあの声。それはやはり光を誘うものだ。だが、死なせはしないという言葉には、力がこもっていた。確固たる想いを秘めた、力強さ。

――死なせなしない。

光はその言葉を自らの頭の中で繰り返した。それは、つまり自分を守ってくれるということなのだろうか。わからなかった。こんな自分を守って、声の主に一体何があるというんだろう。疑問は尽きない。

ふと、彼は進退を話し合う人垣の中心に立つ幼馴染の横顔を垣間見た。美しいと、彼は素直に思う。そして、自分が進んだ場合、彼女はどうするだろうかと思いを馳せる。ついてきてくれるだろうか。それとも――。

『…ついてきてくれるさ…。…心配するな、彼女は守る…』

ぐるぐると思考を巡らせていると、彼の心を知っているかのようにまた声が響いてきた。自分の考えていることへ応えをよこした声の主に、光は驚くと同時に、反射的に聞き返していた。

――あなたは誰ですか？

応えはすぐに返ってきた。

『…遺跡の主…そう言えば納得するか？』

理解は出来た。だが、納得は出来なかった。遺跡の主を名乗る返答に、疑問は解決するばかりかますます複雑になり、増えていく。最大の疑問は、その声を信じていいのか、ということだ。

『…俺を信じろ…』

再び声。言い方は命令形だ。しかし、その中に光は自分に似通ったもの――もしくは同じもの――を感じた。それは、直感以外のなにものでもなかった。

――わかりました。

光は心の中でつぶやくと、未だに話し合いを続ける一行を尻目に、奥へと続くであろう階段を上り始めた。そんな彼を見て、アリスが慌てて追いかける。彼女は光に追いつくと、彼を押しとどめ、動揺を隠すそぶりも見せずに問いかけた。

「光　、どうしたのよ？一人でどこ行くつもりなの？！」

「…ボク、先行くから」

「先行くって…あんたがこんなところで先に進めるわけ…！」

アリスは、自分の言葉を途中で切った。どうせ自分は進むつもりでいたのだし、光がそう言うのなら。それに光だけじゃ心もとない。あたしも行こう。それだけの思考と決断を一瞬で下すと、光を抑えたまま振り返り、教授へ視線と言葉を投げる。

「あたしも先行きます。ので、デジカメ貸してください」

結局、遺跡の奥へ進むことを決めたのは光とアリスの他には教授一人だけだった。教授は先頭に立ち、懐中電灯を奥へ向けて逐一周辺の様子を探っていた。そんな彼の様を見ながら、アリスは小さな声で光に聞く。

「どういうわけなのよ？なんっていうか、あんたが率先して行くなんてあたしにはまだ信じられないわよ」

「ひ、ひどいよ…ボクってそんなに頼りない？」

「…うん」

「…そうだよね…」

躊躇は一瞬、すぐに首を縦に振ったアリスを見て光はため息と共につぶやいた。自覚はしている。そう長くはない今までの人生を振り返ってみても、自らの意思で行動したことはほとんどないし、ましてやアリスに先んじて何かをするなんて思い出せる限り一度もない。

我ながら不甲斐ない、と思いながら、光は同時に別のことを自分ではないものに対して言う。もちろん、それは言うというより念じると言ったほうが色々な意味で正確なのだが。

心の底で念じれば、それに応えが返ってくる。自分にだけ聞かせるように、頭の中に響く声。そしてその声は、教授の命は保障できないと告げていた。　目の前で必死に安全を確保している――出来ているかいないかはともかく――その人を見ながら、ネガティブな思考がぐるぐる回り始める。

「光？今の聞いてた？」

突然話しかけられて――突然なのは光にとってだけだが――彼は思わず身体を強張らせたが、すぐにそれがアリスの声だとわかって肩の力を抜き、そして謝った。

「ごめん…聞いてなかった…」

「さっきからあんた様子ヘンよ？なんかぼーっとしてさ…何かあるんじゃないの？」
ため息交じりの、呆れた風な言葉だったが、心配してくれていることは光にもわかった。伊達に二十年近くを共に過ごしてきたわけではない。
じっとこっちを見つめるアリスを見て、光はやはり彼女にだけは全部言ってしまおうと心に決めた。よしんば全てを言ったとしても、彼女の口から周りに漏れることはないだろうし、彼女のことだ、それをバカにしたりはしないだろう。
「…アリスには隠せないなぁ…」
決心をしたところで、光は苦笑しながらつぶやいた。この言葉に、当然アリスは首をかしげながらも、努めて優しく光に尋ねることとなる。
「…何かあったのね？」
断定的に聞いてくるところもいつも通りだ。
「あのね…」
光は、先を行く教授に目をやりながらアリスを見上げる。アリスはその行為の意味するところをすぐに理解して、腰をかがめて耳を差し出した。肉体的な成長をどこかに忘れてきてしまった光は、女性の中では高めの彼女とは大きな身長差があるのだ。
アリスは無言で光の話を聞いていたが、それが終わるとゆっくり身体を起こしてまじまじと光を凝視した。本当なのかどうかを、見極めようとしているようだ。
「信じて…くれる…？」
そんなアリスを遠慮がちに見上げながら、光はおずおずと尋ねる。アリスはそのまましばらく光を見つめていたが、やがてふっと笑うと囁き返した。
「とりあえずは信じてあげるわ」
「…とりあえずって何なの？」
光のその問いに、アリスはただ微笑みを返すだけだ。瞳にはいた

ずらっぽい色が浮かんでいる。それは光にとって、昔からよく見てきた目だ。からかうように自分を見る目。それを向けるときの彼女は、いつもまるで月のように柔らかな微笑を浮かべていて、そしてそんな彼女を見るたびに、えも言われぬ胸の痛みを光は覚えるのだった。

『…光、そこで止まれ…』

突然頭の中にあの声が響いた。急なことに、思わず光は足を止めて周りをきょろきょろと見渡す。そして、そんな彼を見ながら怪訝な顔を浮かべつつアリスも止まった。

そんな彼らの目に、懐中電灯を振り回していた教授が瞬時に紅い花を咲かせて倒れ伏す光景が飛び込んできた。幸か不幸か、周囲の暗さでそこまではっきり見えたわけではなかったが。

「ぐあああぁぁぁ……ッ！」

二人とも、思わず息を呑んだ。ひんやりとした石畳が続く床に倒れた教授――だったもの――には、全身に無数の矢が突き刺さっている。頭、喉、胸。致命傷が多すぎる。ほぼ即死だったろう。

だが、更に二人を驚かせることが起きた。無数の矢に射抜かれた教授の身体が、ゆっくりと光る粉らしきものに変わっていくのだ。それは周囲に風があるわけではないのに、まるで呼び寄せられているかのように奥へと消えていく。暫く後、そこには血以外は何も残っていなかった。呆然と彼らはそれを見つめるだけだ。

「…光？どうすればいいのよ…？」

アリスが、前へ視線を向けたままやや震えた声で聞く。もちろん、その質問に相応しい回答を光が持っているはずがない。目の前で人が死んで、しかもそれが消えていくなんて経験、あるはずがない。そんな彼の心中に、再び声が響いた。

『…近くの壁に…コンドルが中に描かれた太陽のレリーフがあるはずだ…それに触れ…』

声は、まるでこの状況を意に介していないようだった。人が死んだということより、光たちを先に進めることを優先している。

――あなたは…人が死んだのにそんなことを…！
光は声に出さずに叫んだ。冷たい言葉に少なからず怒りを覚えているはずなのに、相変わらずその声に親近感――同時に共感も――を覚える自分を責めるかのように。
『…そりゃ悪かった…。けど…どういう状況でも俺にとっちゃ…お前たちを俺のところにつれてくることが最優先事項なんだよ…』
人の死というその状況で、その声は冷え切っていた。周囲のことよりも何より、自分と、自分が求める存在だけしか見ていない。あまりにも冷めたその態度に、光は恐怖で何も言えなかった。同時に、そこまで非情になれることにわずかばかりの尊敬を抱く。
だが、アリスはともかくどうしてこの遺跡の主とやらは自分に執着するのだろう。何度か光は尋ねたが、これに対する答えは非情に曖昧で要領を得ない。
『…ほら…太陽のレリーフに触りな…』
光と主との間ではテレパシーのようなもので会話が続く。しかし、実際は声に出して行われているわけではないので沈黙が続くばかりだ。何度か声がそう告げて、光はようやく動き始めた。
「…光？」
周囲の壁を念入りに観察――少なくともアリスにはそう見えた――し始めた光に、彼女は搾り出すようにして尋ねた。光は、壁に手をかけながら振り向いてそれに答える。
「えっと…その、コンドルが中にある太陽のレリーフ探せって…」
「…教授は無視なの？」
光は声の言ったことをそのまま伝えたわけなのだが、アリスはやはりその、人の死を黙殺する行為に、怒りを抑えながら聞き返した。
「…うん…ボクたち以外は…その…どうでもいいみたいで…」
「いいわけないじゃない！」
光に詰め寄りながら、遂にアリスは激昂した。震える声が、怒りによるものなのか恐怖によるものなのかはアリスにもわからない。
「う…っ、ご…ごめん…」

光はアリスの勢いに気圧されて後退り、壁に背をつける。その口は、とっさに謝罪の言葉を紡いでいた。怒りに燃えるアリスの視線と、そんな彼女におびえる光の視線が重なって、二人はそのまま沈黙した。

「…あんたに言ってもしょうがないわよね…」

しばらくして、沈黙に耐え切れなくなったのかアリスが視線をずらしならつぶやいた。そのまま身体の向きも変えて光に背を向ける形になる。

「…ごめん…」

そんなアリスの背を見つめながら、光は再び謝った。それを聞いたアリスは振り返らずに言う。

「別に謝らなくていいでしょ。…太陽のレリーフよね」

彼女の無理に感情を抑えつけている声色が、何故か光の心にのしかかった。その後、二人の間に会話は起こらなかった。

ぎくしゃくした空気を抱えたまま、二人は遺跡の奥へとたどり着いた。巨大なアーチをくぐった先は、見渡す限りは広場――あるいは祭壇――であり、更に奥へと続くようなものは見当たらない。行き止まりであることを確認するかのように、二人は部屋中を見回す。

「よく来たな、我が炎を灯す蝋燭、そしてそれを支える燭台よ！」

出し抜けに、声が響き渡った。あの声だ。あの、男にしては高い声。だが、今回決定的に違うのは、その声が頭の中に響いているわけではないということだ。その声はこの広間全体に響き渡り、何度も反響しては折り重なり、あらゆる方向から二人に飛んでくる。

そして、声が響くと同時に目の前の空間が歪んだ。歪んだ場所に、本来そこにあるはずのないものが浮かび上がり始める。間違いなく零であるはずのものが、一になろうとしている。そして空間の揺らぎが収まると同時にそれは一となり、音もなくその場所に降り立った。

青みがかった紫の長髪。左側だけより長く、その部分は深い緑色の髪飾りで留められている。身に纏うものは、この遺跡の雰囲気とはおおよそ似つかわしくない、シックで現代的なものだ。肌は白いが、よく見ればほんのりと薄めの、黄色人種のペイルオレンジだとわかる。その色に染まる顔には、自信と若さが溢れていて、口元に湛えた不敵な笑みが整った顔立ちを引き立てている。そして――その顔に宿る瞳は翠緑色。

その男の姿を見た瞬間、光は息を呑みアリスは光を見た。同じ色だった。どれだけ暗かろうと、美しく輝く緑。その瞳がもう一つある。そして、光が驚いているのはそれだけではない。

「おいおい、人を見てそんなに驚くなよ。別にお前達には珍しくもないだろう？」

諸手を広げて男はおどけて見せた。一瞬だけその顔は自虐に染まったのは、恐らく本人も気づいていないだろうが。

「…か…カイト…？」

光はようやく、辛うじて聞き取れる程度の声をひり出した。

そう、あの物語の世界の創造主にして世界そのものであるカイト。それが、まるでそのままこちらへ抜け出てきたように男の姿はカイトに似通っていた。男の方がいささか髪が長いが、それは大した違いではない。

「おう、なんだ？」

にやりと口元を引き上げながら、男は応じた。こういうときの仕草まで、カイトそのものだ。その動きに再び二人は沈黙し硬直した。それを見て、男はやれやれという感じで後ろ頭をかく。

「…参ったな、想像以上に驚いてくれちゃってまあ」

そう言うと、男は急に改まって二人に向き直ると、慇懃に頭を下げた。

「カイト・シルヴィスと言う。よろしく、な？」

そして、その状態で顔だけ二人に向けるとにやっと笑う。

「な…」

ようやくと言った感じでアリスが口を開く。それを見て男――カイトは身体を起こして首を少し傾げると、彼女を見つめた。
「な…なんで…？」
「なんで、か。くく、まあ強いて言うなら…運命、かな？」
不敵な笑みを浮かべたまま、カイトはそれだけを言うと、声を押し殺して笑った。
「何がおかしいのよ…？！」
「くく…いや悪い悪い、気ィ悪くしたなら謝る」
謝るなどと口で言っているが、その態度にそんなそぶりはかけらもない。
「まあそんなことなんてどうでもいいだろ。本題本題」
更に質問されるのを避けるかのように、カイトはそう言って手を叩いた。乾いた音が広場にこだまする。まだ色々と聞きたいことはあったが、二人はカイトの取り出したものを見て絶句した。
「うん、まあ本題ってのはな…」
文明が発展した現代において、それはありえないものだった。光を寄せ付けないような黒い身体を持つそれは、過去の力の象徴だ。
「…死んでくれ、ってことなんだ」
もう一本。両の手にそれ――剣が握られた。二匹の剣がひゅ、と風を切って中空でぴたりと止まる。そしてその剣を握るカイトはいつの間にか、先ほどまでの飄々とした顔ではなく冷酷で空虚な無表情になっていた。そして、その視線はまっすぐ光に注がれている。
「ぼ…ボク…？」
光が搾り出すように言うのと、カイトが駆け出すのは同時だった。風を纏い、双子の黒き剣が光を襲う。それは、踊るような動きを見せて閃いた。
光がそれを認識するのと同時に、何かが――否、誰かが彼とカイトの間に割り込んだ。そして――。
ザシュ…っ！
肉が断ち切れる嫌な音が二つ、重なって響く。カイトと光の間で

鮮やかな緋色の花が咲き、ゆるやかに散っていった。
そのまま斬り裂かれた勢いが消えることはなく、光の身体は押し出されて地面に転がった。痛みから立ち直って目を開けてみれば、そこには血の気の引いた青い顔をしたアリスが覆いかぶさっているのが見えた。カイトは、恐らく斬りかかった体勢のまま硬直している。
『アリス…っ！』
光とカイトの言葉が重なった。だが、彼女から返事はない。
アリスの身体からあふれ出る血が光を濡らす。体温の生暖かさがねっとりとまとわりつき、肌も、服もじわじわと紅く染まっていく。
「…こう…なるのか…結局…こう…」
諦観に満ちた声が弱弱しく響く。無念。そんな感情がカイトの顔から見て取れた。握り締められていた二匹が彼の手から離れ、床にぶつかって悲鳴を上げる。
光はしばらく呆然としていた。何が起こったのか理解できないというより、今起こったこと、そしてこの状況の理解を拒むかのように。目の前には、自分に覆いかぶさっているアリスの姿。だがその姿は今にも消えそうな蝋燭を思い起こさせる。
「…ひ…かり…」
アリスの消え入るような声で、光は我に戻った。相当の無理をしているのだろう、彼女はむせながら血を吐いた。それはゆっくりと光の頬へ落ち、水玉模様よろしくいくつかの円を作った。
「アリス！アリス！しっかりして…！」
身を起こし、アリスを抱きかかえながら光は搾り出すように言う。脳が直感で言っていた。助からない、と。
一方のカイトはというと、目を閉じたままその場に立ち尽くしている。その脳裏に廻るのは、この後に起こる光景だ。彼にはわかっている。自分が体験したことだから。
「…ごめん…光…。あたし…も…う、ダメ…みたい…」
血を吐きながら、アリスはか細い声で光に答えた。その灯火は既に消えようとしていた。

「やだ！アリス行っちゃやだ！一緒に…一緒に帰るんだ！」
「…ごめんね…」
「アリス…っ！」
アリスの身体を抱き寄せて、光は叫んだ。震えた声が静かな部屋いっぱいに響き渡る。悲痛なそのこだまは、二人だけでなくカイトの耳朶を打つ。すっと見開かれた瞳は悲しみに染まる翠緑色だ。
「…光…最期…に…言わせて…ほしいこと、が…ごふっ！」
「アリス！ダメだよ、しゃべっちゃダメ…！」
「はぁ…はぁ…。…いいから…聞いて…。…今まで…ありがとう…。もう…ずっと…、一緒…って…できない、けど…。たのし、かった…よ…」
「ぅ…ぐすっ、アリスぅ…！」
「…ずっと…一緒に…いたかった…。…ごほッ！…ぅ…、光…大、好きだったよ…」
「アリス…。ボク…ボクもアリスのこと…！」
血と涙に濡れた幼馴染の顔が、赤い血が滴るその唇が、そっと光のそれに触れた。口の中に鉄の味と、ほのかな想いが広がっていく。
やがて、糸が切れた人形のように、アリスの身体が光から離れた。目は閉じられており、けれどもその口元には微笑が宿っていた。その姿から、カイトは目をそらす。
「…ア…リス…？…アリスッ？！」
光は叫ぶが、アリスからの返事はなかった。ただ、その身体だけが何かを訴えかけるようにそこに残っている。
「イヤだよ…！死なないでよ…。ボク…アリスがいないと…ダメなんだよぉ！」
涙が溢れて頬を伝い、そして零れ落ちアリスの顔に滴る。それはすぐに血と混ざって赤くなり、すぐさまその暖かさは奪われる。
「…アリス…。…ボクも…すぐに…行くよ…」
言いながら、光はバッグに挟んであったカッターナイフを手に取った。カイトはそれを止めようと慌てて近寄る。しかし。

「……」
それはすうっと吸い込まれるようにして光の喉笛に突き刺さった。華々しい花を咲かせながら、光の意識は急速に遠のいていった。意識が沈みきる直前、やはり諦観しきったカイトの表情が彼の眼に焼きついて、そして消えた。

「結局…こう、なっちまうんだな…。なんでかなー、なんでこうなるかなー…」
…カイト…？それにボク…死んだはずじゃ…？
「こうなった以上、お前に死なれるのは困るんだよ…」
…殺したくせに…！アリスを殺したくせに！今度はなんなの…？もう、もうやめてよ…！
「終わらない、切れない鎖があるんだ…」
…え？
「俺は…生きたよ…。数億…いや、もっとだな…とにかくたくさんだ。それだけ生きてわかったのは、死んだものは生き返らないってことと、とんでもなくでかい無限螺旋の一端だけだ」
…？
「なあ、もし、もしだぜ。もしどこかに死人を生き返らせる魔法なんてのが存在する世界があるとして、しかもそこに行ける可能性があるってんなら、お前はどうする？」
…生き返る…？そんなこと…。
「よくあるだろ？死んだ恋人を生き返らせるために奔走するってお話。んで、実際生き返ってめでたしめでたしってな、そんなお話。どうだ？」
…がんばる。どこまでできるかわからないけど…でも、がんばってみる…。
「だろ？俺もそうだったよ。がんばったよ。ありとあらゆる知識と知恵を身につけて、もし次があるなら守る、だから強くなろうと思

った。…でもダメだった…」
……。
「そして俺は思った。永い旅路の果て、限りなく全能に近づいた今の俺なら、創ることができるはずだと。…記憶、経験、知識。それらを総動員して、俺は創り上げた。すべては…すべては、彼女を生き返らせるために」
…彼女…？
「そうさ、彼女だ。何度やり直したかは記憶にない…正確に一致しなければそれはもう別なものになる…だから創っては滅ぼし、滅ぼしては創った」
……。
「そして、今回は上手くいったんだ。同じだった。何から何まで一緒だったんだ。歴史は正しく導かれて、この世に俺と彼女が生まれた。…でも…終わりまで一緒だった…ッ！」
…終わり…。
「そうだ。俺は俺に殺されかけ、彼女は俺をかばい、俺に殺される。そして俺はそれに耐え切れず、自ら命を絶つ！何から何まで一緒だ！こうなったらやることはあの時と同じだ！俺は俺に命を譲って死ぬ。そして俺は、彼女のために旅に出る！」
…え…？
「まだわからないか？ここまで一緒でなくともいいのに…。…いいか、光。俺はお前だ。そして、お前は俺なんだ！」
…ぼ…ボクが…カイト…？
「そうだよ！…そして…俺は…星の一生以上の時間を生きて、ようやく、ようやく彼女に会えた…。でも、彼女のそばには俺がいる！何も知らない、知らなかった頃の俺が！俺がいないと、彼女も来ないから！…だから、俺は俺から彼女を奪おうとしたんだ！さっき、彼女はお前になんていった？お前は彼女になんていった？その想いは、俺だって変わらない！…ただ、あまりに永く生きすぎたというだけだ…」

カイト…。
「光。お前はどうしたい？お前は彼女に…アリスに、もう一度会いたいか？」
会いたい…。たくさん…言いたいことがあるし…たくさん…。
「…可能性ってものがある限り、それはゼロじゃない。だからお前に命をくれてやろう。俺はもういい。俺はもう、疲れた…」
…でもそれじゃ…。それに…生き返らせるならボクじゃなくてアリスを…。
「バーカ、条件もなしに人を蘇らせるなんて離れ業、出来ると思うな。命を呼び戻すには同等のモノが必要なんだよ。つまり、同じ種別の命がな」
…え…。
「だから、お前を生き返らせるか、彼女を生き返らせるか、の二つに一つだ。…ああ、誰も生き返らないってのもありか…」
…じゃあアリスを…。
「お前な、そうしたらどうなると思う？遺跡に彼女だけが取り残されるぜ？」
…う…。
「逆にお前なら…なんとかなる。お前は、俺だからな」
……わかったよ…。
「…よし。それじゃ…俺はお前に全てを託す。あとは任せたぜ、光。…受け取れ、俺が振るった黒い剣と、お前も持ってるはずの白い翼だ」
……っ？！
「今から、お前が大空を飛ぶ鳥だ。そして、俺はお前を包む青い空になる。…じゃあな、俺」
…あ…ま、待ってよ、ボク…っ！
「…ん…」

気がつくと、そこは先ほどと同じ場所だった。しかし、そこにカイトの姿はない。同じく、アリスの身体も。
「…ボク…もう…ひとりぼっちなの…？」
ふと、すぐ近くで光るものが目に入った。よく見るとそれは、アリスが普段から身に着けていた黒水晶のペンダントだった。それは、炎の煌きを受けてかすかに赤い輝きを放っていた。
「これ…アリスの…？」
言いながら手に取ると、ペンダントが開いた。そこはロケットになっていて、中には一枚の写真と紙切れが入っていた。
その写真は、光とアリスが小さい頃、一緒に撮ったものだった。今とあまり大差ない幼い顔を輝かせている光と、あの勝気な、だけどまだ幼かったアリスが並んで映っている、二人だけの写真。そして、紙切れには子供――特に幼児くらいの――が書いたと思われるつたない字が、並んでいた。
――ずっと、いっしょだよ。
「…ボクたちが保育園のときの…？」
光はしばらくそのまま写真を見つめていたが、やがてそれらを元通りに仕舞うと、ペンダントを首から下げた。黒水晶が、まるで宿るべき主を見つけたかのように、あるいは、長年の想い人に身を寄せたかのように、キラリと輝いた。
「…アリス…ずっと…一緒だよね…？」
ペンダントを手のひらに乗せて、光はそれに向かって話しかける。今まで、それの持ち主だった少女と話すときのように。ただし、涙はなかった。
「ごめんね、ボク…しばらくアリスのところには行けないよ…。きっと…きっと、アリスを生き返らせてみせるから…。でも…こうやってボクがこのペンダントを着けてる限り…一緒だよね？…ボクを…見ててくれるよね？…ボク、行くよ…！」
それだけ言うと、光はやおら何かを喋り始めた。
それは、この世界の言語ではない。恐らくは、カイトが培ったであ

ろう、外宇宙の言語による異能力。それは黒き水晶に祝詞を捧げるかのように広間に高らかに響き渡り、光を七色の輝きが取り囲んでいく。そして、それらが完全に光を覆い隠したそのときだった。

キュアアアアァァン！

鋭い音と共に、七色に輝く球体は上空へと飛び上がった。そのまま天井付近で、水面のように空間に波紋を残して忽然と消えた。光の姿と共に。

4．キオク

風がそよそよと吹きぬける。草はぶつかりあって涼やかな音を奏で、やがてそれは遠くへと走り去っていく。そこは、見渡す限りの平原だった。遠い地平線に、ぼんやりと街らしき影が見えるが、ここからではわからない。

そんな草原を一人の男が歩いていた。その風になびく長い髪は銀。ふちなしのメガネの奥には、優しい微笑みが湛えられている。男は、その笑顔を崩すことなくゆっくりと歩を進めている。

そんな男の瞳が草に横たわる小さな人影を映した。真っ直ぐ歩いていた男は、そこで向きを少し右へずらすとその人影のほうへ向かって歩き始めた。

それは少年だった。気を失っているらしく、黒髪であること以外はよくわからない。だがその服装は男の服とはかなり違う類のものだった。それなりに見聞は広いと思っている男でさえ見たことがない。まるでこの世界のものではないような、そんな雰囲気を漂わせている。

男は少しだけ考えたが、すぐにその少年を抱きかかえるとその広い背中に背負う。男に比べると、ただでさえ小さな少年の体がさらに小さく見えた。

「…ん…」
青年の背で少年が声を漏らした。ゆっくりとそのまぶたが開かれる。少年の声を聞いた男は、首を回して視線だけ後ろの少年へと向けた。少年の眼窩には、翠緑に輝く瞳が宿っていた。男の銀色の瞳が、その緑の光を受けて輝いた。
「大丈夫ですか？」
「…あなたは…？」
しばらく少年はぼんやりと男を見つめていたが、やがて自分が背負われていることに気づいて無理やりに男の背から飛び降りた。
「気を失っていたわりには元気ですね。それならば大丈夫でしょう。…ああ、質問に答えていませんでしたね。私はサトゥール。あそこにうっすら見える街で教鞭を執らせていただいているものです。…君は…？」
「ボクは…きりは…っ」
少年は何かを言おうとして、言葉を詰まらせた。そのまましばらく口を噤む。サトゥールと名乗った男はそんな少年を急かすこともなくただ微笑みを浮かべている。
その沈黙の後、再び少年は口を開いた。今度は詰まらせることなく滑らかに。
「ボクの名前はカイト。カイト・シルヴィス。時を越える翼を持つ者――」

Ｆｉｎ

（後書き）

どうも、ひさなぽぴーでしゅる。

現段階（07年8月15日）で、他の長編が完結していないのであとがきをかくのは初めてになりますか。みなさまよろしくおねがいいたします。

さて、今回は短編を投稿させていただきました。いかがでしたでしょうか。

相変わらず文章がかたっくるしいですが、そのあたりはご勘弁の程を・・・。

このお話、実は某小説大賞に応募して見事一次選考すら通過できなかったというシロモノ。個人的にはなかなかうまくできたなーと思ってるんですが、いかがでしょう。

指摘等々、何かございましたら遠慮なさらずにガンガン切ってくださいませー。

さて、今回はこんなところで終わります。またあとがきでお会いいたしましょう。ではではっ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5006c/

不死鳥の卵～ｌｉｇｈｔ　ｗｒｉｔｅ　Ｋｎｉｇｈｔ～

2010年10月8日15時50分発行